

を皆焚いて仕舞ひよつて一枚も無い様に成てます。よう用心の悪ふ無い事やと思ひますが、盗人も滅多に這入ては來まへん。迂濶に這入たら反對裸にしられる。怖い所が有る物で。……雪隠裏と云ふのは長屋が百二十軒で便所が百六十建てたア。家主も賢い、どふせ家賃なんて取れ相も無い依て、糞取りで飼ふといたれ。驚見たいに思われてよる。斯ふ云ふ長屋へ往きますと、家賃拂はん講てな講を組だりして、日家賃の溜つた事を自慢する奴がふります。

『お前とこ幾つ溜めた。』

『溜まらん物やなア。今日で六十四や。』

『あかなア。俺等四月前から一つも拂やへんで』

『確かに溜めたなア。徳やんはどふや。』

『俺の親爺は家賃を拂はなんだ相な。』

『ハ一成る程。すると其古いのを待つて貰ふて、お前の代から拂ふてるのやな。』

『阿呆云え。俺が拂ふたら死だ親爺へ面當て見たいに成るや無いかい。そんな不孝な事が出来るかい  
チャンと親爺の志を襲いで一つも拂はん。』

『豪い志を襲ぎよつたなア。親の代から拂わんと云ふのは感心や。……お梅はん、お前處はどの位家賃溜めてる……………。』

『兄さん。家賃云ふたらどんな物や』

『冒頭から家賃を知らん奴が居ます。』

『オイ源やん。好え天氣に成たなア。』

『フム好え日和や。』

『こんな好え天氣に成るのんやつたら、仕事に出たら宜かつたなア。』

『さふや。朝鳥渡曇つてもんや依て、こら怪しいと思ふて出損ふた。』

『長屋の連中も大分出損ふてよるで。天氣が宜ふ成て來た物や依て、表をゾコ／＼人が通るや無いか彼れを見い。何ふやエ、。仰山出よるなア。』

『何處へ往くのやろ。』

『知れた事ちや。皆花見に往くのやがな。』

『結構な身分やなア。俺いらかて同じ人間や。一遍でも宜え依て、あんな身分に成て見たい。』

『そないに悔みな。人間と云ふ物は七轉び八起きや。』

『俺い等は左様や無いで。七轉び八轉びや。』

『此世は夢の浮世と云ふや無いかいな。彼の人達は好え夢を見て御座るのや。』

『俺い等は年中悪夢はれてるのやろか。』